

防災新聞

防災の日



1923年9月1日、正午2分前に発生した関東大地震はマグニチュード7.9と推定され、南関東から東海地域に及ぶ地域に広範な被害を及ぼしました。この『関東大震災』に由来し、地震や津波等の災害についての認識を深め、災害に対処する心構えを持つために1960年内閣の閣議了解により制定されたのが「防災の日」です。この地震を教訓にする思いも込められています。9月1日は暦の上では「二百十日」立春から数えて210日目にあたり台風シーズンを迎える時期であり、1959年9月26日の伊勢湾台風によって戦後最大の被害を被ったことが契機となつて、地震や風水害等に対する心構えを育成するため防災の日が創設されました。

東海地方の災害

東海地方では、前掲した伊勢湾台風が災害の代表例です。巨大な台風がこの地方を中心に襲いかかり、死者行方不明者約5千人、流出・全半壊家屋約16万戸に及ぶ甚大な被害が発生しました。今年伊勢湾台風襲来60年目の節目の年です。2000年9月に起きた東海豪雨では台風の影響で2日間で600ミリの雨が降り、新川の堤防が決壊し、山田高校周辺でも大きな被害がありました。自然災害は突如として襲ってきます。災害の恐ろしさを知り、それに対する準備や知識をつけて常日頃から災害を意識した生活をし、万が一の時の対応、ルールを家族で決めておきましょう。

山高生に伝えたいこと

もしもの時すべきこと。まずは自分の身の安全の確保、次に脱出口の確保です。避難する際はブレーカーを落とし、ガスと水道の元栓を閉めましょう。また、空き巣や火災の延焼を防ぐ必要もあります。災害時には「自分の身は自分で守る」という意識を持つてください。助けてくれる人がいないかもしれない。家族や友達と連絡する術が無いかも。自分で考え、自発的に行動することが求められます。自分たちの命を救うだけでなく、周りの人々も助けられるように今から準備することが大切だと思います。

「電気と防災」

講師の先生の講演をお聴きして感じたことは、災害を予知することはできないということ。人が確認して直すため復旧に時間がかかる恐れがあるそうです。もし、停電が夜中に起こったなら家の中も外も真っ暗で身動きが取れずパニックになる人もいます。懐中電灯が必要になってきます。もちろんスマホのライトでも構いません。夜に停電が起こったときに安心して動けるように、明かりが家のどこに備えてあるのかを把握し、いざとなったら困ることのないように準備しておきましょう。

世界有数の地震大国

日本列島はユーラシアプレートと北米プレートの上に乗っており、その下に太平洋プレートとフィリピン海プレートが潜り込んでいます。これらのプレートの相互作用により、境界沿いにプレートの一部が隆起して生まれた島です。日本列島の面積は世界の陸地の400分の1でしかないにもかかわらず、世界で発生する地震の約1割が日本周辺で起きています。

B i C U R I

減災館ではB i C U R Iという振動再現装置で再現された東日本大震災と、熊本地震の揺れを体験しました。どちらも揺れの種類は違いましたが、自分が想像していたよりも強い揺れでした。私たちはまだ巨大地震の被害にあつていません。災害はいつどこで起こるか分かりません。そのとき自分は減災できるのか真剣に考えてしまいました。

減災館を見学して、改めて「備える」こと、二次・三次災害を防ぐために必要な「知識を持つ」ことの大切さを学びました。この新聞を見たその日から、皆さんも是非、もしもの場合について考えてみてください。

(文責：防災委員)

